A Song for Every Season（4）

潟　山　健　一

【7月】

「ある清々しい夏の朝、散歩に出かけてみると
畑も草地もこの上なく青く鮮やかで、
鳥たちはとても賑やかに美しい囀（さえず）りを響かせていた。
また一日がはじまろうとする暁（あかつき）の頃」。

「スウィート・レミニー（Sweet Lemeney）」

羊毛刈りがすべて終わると、今度は羊の競りについて考える時期が訪れます。この地域では至る所で羊の競りが行われており、会場ごとに毎年の開催日が決まっていました。方々の村から、農場主や羊飼い、牛追いたちが、各々羊の群れを率いてこの近辺だけでなく他の州からも大勢集まりましたから、この時期に催される競りは、皆が心待ちにする大切な交流の機会となっていました。羊の競りはどれも毎年決まった日に開かれていましたので、それぞれの日が一年のうちの節目として馴染み深いものとなっており、まるで教会に集う信徒らが宗教上の定めとしてある断食の時期や祝祭の日を把握しているのと同じように、牧羊業に携わる者の頭のなかには、競りの日程がしっかりと刻み込まれていました。ですから彼らは、何れか特定の日のことを話題にしようとする際、例えば、「さぁて、たしかセント・ジョンズの２週ばかし前じゃなかったかな」というような言い回しで、この場合ですとバージェス・ヒルの近くで毎年７月５日に催されていたセント・ジョンズ・フェアと

いう名の競り市を基準に、その事柄が何月何日のことであったか推定するのでした。

私の叔父、ジョンは、長年に亘ってサセックス中のありとあらゆる羊市に足を運んでいましたので、その様子について色々なことを私に教えてくれました。30年を優に超える歳月をロッティンディーンの農場で羊飼いとして過ごしていましたから、丘の上で仕事に勤しんできたその生涯は、叔父の性格に拭い難いほどの痕跡を残していたように思います。叔父を知る人なら誰でも、人間の気質というものが、如何にその人物の生業と日々身を置いてきた環境に左右されるものかと感じずにはいられなかったでしょう。叔父は物静かで慌てるようなところのない、几帳面な人でした。もっとも、この［訳者補記 イングランド南部の］丘陵地帯で何世代にも亘って牧羊や農業に従事してきた家系ですから、こうした特質のある程度の部分は間違いなく生得的なものであったでしょうけれど、広い丘の上で、何年もの間たくさんの羊たちの世話をし続けてきたことで、すでに持ち合わせていたその種の気質は確固たるものとなっていったのに違いありません。

この丘陵地帯自体が、様々な教訓を授けてくれる大きな存在であったという言い方も出来るでしょう。どこまでも続く広大な丘と海と空を眺めていれば、人生を広い視野から捉えることの大切さに気づかされますし、羊飼いの仕事は人に忍耐というものを教えてくれます。昼が過ぎれば夜が来るのと同じように、交配、出産、毛刈り、そして競りといった一年のうちの決まった作業が次から次へと季節ごとにやってきます。どれだけ苛（いら）つこうともやきもきしようとも、その手順が変わることは決してないのです。

かくしてジョンは、紛う事なき丘陵地帯の羊飼いのまさに典型と言ってよい人物なのでした。片方の手にはいつも鉤杖（かぎづえ）を持ち、傍らに犬を連れていた叔父は、悪天候に見舞われることも多いなか、ひとりで長い距離を歩くことに慣れた人特有の歩き方を身につけていました。重いブーツを履いた足を大股で地面から素早く伸ばし、腰から先に前へ踏み出す。こうすることで、叔

父はほとんど力を入れているようには見えないのに驚くべき速さで歩きました。叔父は背の高い方で、やや猫背ではありましたが肩幅が広く、その手は大きくて器用でした。しかし、何にもまして私の記憶に刻まれているのは、叔父を包み込んでいる穏やかなオーラでした。仕草も話し方も考え方も、どれもこれもが速度を落としたゆったりとしたもので、その心のなかの平穏をはっきりと映し出していましたし、こうした穏やかさが、叔父を、あたかも大きな振り子時計がゆっくりと静かにチクタク時を刻むかの如く、私たちの気持ちを落ち着かせ、安心させるような存在と感じさせているのでした。叔父はたくさん物語を知っていましたし、経験談も豊富で、いつも決まって一本だけ残っている黄色がかった強そうな上の切歯のところに胴の短いブライア・パイプをくわえながら、とても楽しそうに色々な話をしてくれました。叔父の話は間延びしていることが多く、「あいつがこう言うもんだから」「オレもこう言ったんだ」というような引用符のついた会話の模写が延々と幾度となく繰り返されました。滑稽なことが起こったときの状況を思い出すと笑いがこみ上げてくるものですから、叔父の両目は閉じているときすら瞼越(まぶた)しにきらきらと輝いているかのようで、その様子はまるで鳩の瞼のように下から上に向かって閉じているかのように見えましたし、話している叔父の笑顔も、話が進むに連れて益々明るさを増していきました。叔父の声はどんどん音程が高くなり、仕舞いにはまったく、とまでは言いませんけれど、ほとんど何を言っているのか聞き取れないほどになりました。しかし、叔父の醸し出す雰囲気はとても人に伝わりやすいものでしたから、たとえ何の話であったかわからなくなったとしても、最後は聞いている皆が、叔父と同じくらい楽しく笑って終わるのでした。

「セント・ジョンのとき、一晩アヒル小屋で寝たことがあったんだが」と、叔父は一瞬、チョーサーを思わせるような口ぶりで話し始めました。「ロッティンディーンを発つのは、だいたい競りの日の３日前ぐらいだった。そうすりゃ途中たっぷり時間があるんで、羊たちもへばらねぇし、まる一日、羊の奴ら

を組に分けて競りの支度をする時間が取れるしよ。道中、まあ着いてからもおんなじだが、どっか寝られそうなとこ見つけて野宿するわけよ。しょうがねぇわな。さぁて、どこだったか、あるときオレたちゃ納屋を見つけたんで、そんなかで床（とこ）につこうとしたんだが、ゴロッと横になろうとした古（ふり）い藁山に、うじゃうじゃクマネズミがいやがったのさ。[訳者補記でっかい] クマネズミだぜ。あんな数のクマネズミを見たのは生まれて初めてさ。あいつら蟻塚のアリみてぇにウヨウヨいやがってよ。もうびっくり仰天、横になったオレたちの身体の上をゴソゴソ走り回りやがるんだ。そんなんじゃ、まるで眠れやしねぇ。そしたらしばらくして、納屋の奥の隅っこにさっき言ったアヒル小屋が見えたわけよ。で、オレは四つんばいになってそこへ潜り込んで扉をしめたのさ。おかげでネズミは全然入っちゃ来ねえし、ぐっすり眠れたもんさ」。ここから叔父の声は急激に音程が上がり始めました。「明くる朝、オレの姿がどこにも見当たらねぇもんだからえらいことになっちまってよ。連れの奴らがあちこち探し回ってると、しばらくしてそのアヒル小屋でぐっすり眠りこけてるおいらを見つけたわけよ。あいつら、「おい」って怒鳴りやがって、「ボヤボヤすんなよ、ジョン。今すぐ出て来ねえと卵が孵（かえ）っちまうぜ」」ってよ。

セント・ジョンの市には、たいてい競りにかけるものとしてはやや質の落ちる雌羊が集められていました。当時、この類いの雌羊は１頭あたり10ないし15シリングほどで売られていました。叔父に言わせれば、「老いぼれの、銭にならねぇもんばっかだった」そうで、「なかにゃあ、サクランボ１ポンド分の値にしかならねぇなんてやつもいた」のだそうです。一方、毎年８月８日に開催されていたリンドフィールドの市には［訳者補記独特の匂いを抑えて肉質を良くするために］去勢された最高級の雄羊が集められていました。それらは何れ劣らぬ一級品で、ときには１頭25ないし30シリングもの高値で取引されることすらあったようです。この界隈では、毎年９月21日に立つルイスの市が、一年のうちで最後に催される競りの機会でした。男たちは夜毎集って互いに土産話を語り合ったり歌を唄ったりしていましたが、なにしろ［訳者

補記東隣の］ケント州や［訳者補記北の］イングランド中部諸州だけでなく、それよりさらに遠いところからも羊飼いや牛追いが集まっていたのですからね。ラジオすらまだ無かった時代に、歌がどのようにしていとも簡単に方々へ伝えられたかということにもある程度説明が付くのではないでしょうか。以下の短い詩は、間違いなくこのようにして遠く離れた土地からはるばるサセックスのサウス・ダウンズの広がるこの地域へと伝えられたものでしょう。

「波打つモルヴァンの丘*1は高く聳（そび）え、降る日もあれば照る日もある、
眼下の谷間（たにあい）には羊たちが草を食（は）むけれど
その尾の下には蛆（うじ）が湧き*2
肉を食らって羊毛を台無しにしている。
あぁ、友よラザラス（Lazaras）*3よ、降りて来てこの有様を見よ」。

訳注*1 Malvern Hills は、ウスター、ヘレフォード、グロスターの３州に跨がる、ウェールズとの国境にほど近い丘。サセックスからは100マイル以上の距離がある。

訳注*2 このような事態を防ぐため、牧羊においては生後２週間以内に、子羊の尻尾を切り落とすのが慣行となった。羊は長ずるにつれて毛が長く伸びるため、その尾は重くぶら下がるだけで、牛や馬の尾のように虫を追い払う役目を果たすことが出来ない上、糞尿で汚れて不衛生にもなり、放っておけば蛆も湧きやすい。かつて農家では、生後間もないうちに焼き鏝（ごて）で切り落とした尾も廃棄せず、集めてスープにして食していた。*A Song for Every Season*「２月」参照。

訳注*3『ヨハネによる福音書』11章にある、イエスの友、ラザロ（Lazarus）の蘇生を彷彿とさせる行。

ジョンは何かとゆっくりとした人物でしたが、歌の覚えだけはとても早く、ほんの２、３度聴けば「モノに出来て」いたようです。ですから、競りの帰り道には、「アニキ、この歌はどうだい」などとジム（Jim）［訳注＝筆者 Bob の父］に問いかけては唄って聴かせていたそうです。

「あるところに羊たちの面倒を見る羊飼いの青年がおりました、
晴れ渡ったある夏の日、羊の世話をしていたところ、
向こうから偶然、素敵な若い乙女が近づいてきて
キラキラと輝く瞳でこの羊飼いを見つめていました」*4。

訳注*4「羊飼いの歌（The Shepherd's Song）」。現在も The Copper Family の主要レパートリーのひとつ。

場所を問わず、牛も羊も徒歩でしか追うことは出来ませんでしたから、家畜を追う仕事には大きな需要がありました。どの市場にも競りにも、この仕事を求める何十人もの男たちの姿が見られ、なかには犬を連れた者もおりましたが、いずれも手にはハシバミの鞭や杖を携え、声がかかるのを待っていました。彼らは、市（いち）の立つ町を結ぶ道や、家畜を追い込む古い路地や、丘陵地帯の尾根伝いの道、家畜の群の水飲み場となる池や川などに関して幅広い知識を有していました。尾根伝いの道のうち、古いもののなかにはローマ時代、あるいはさらにそれ以前の時代に起源を持つものもあり、幾世代にも亘って家畜を追う者たちに使われてきたようです。ロッティンディーンの農場主、ブラウン氏は自分の農場専属の者を雇うことが多く、［訳者補記私の父］ジムもかつてこの仕事を請け負っていました。あるとき父は、イーストボーンの近くにあるウェスト・ディーンへ、数十頭の子羊を引き取りに行く仕事を任されました。では、父に自分自身の言葉でこのときのことを語ってもらうことにしましょう。

1907年に結婚してすぐの頃は親父ん家（ち）の隣に住んでたもんで、親父ときたら、何かというと火かき棒で壁を叩いてオレを呼びつけやがってよ。家（うち）にいりゃ親父んとこに出向いたし、オレがいねぇときは、嫁がノックを返したもんさ。

ある晩、ありゃ9月の終わりの頃だったかな。家（うち）に戻って茶一杯飲ん

で、さてと腰を下ろそうとしたところにコツコツコツと来やがった。親父んとこへ行ってみると、なあ、おめえ、明日一日ちょいと田舎の方へ行ってもらいてぇんだってよ。で、そりゃいい気分転換になるぜって言うと、だな、ってよ。旦那が来なすってな、ウェストディーンからたった今戻って来なさったとこらしいんだが、デヴォンシャー公の農場の競りで子羊を30頭手に入れなすったんだとかで、そいつらを明日おめえに引き取りに行ってきて欲しいんだとよ。よっしゃわかったって返事したら、親父が、おめえ、ウェストディーンがどこかわかってんだよなって聞くから、皆目見当もつかねぇって答えたのさ。そしたら親父が、もうその先はイーストボーンってあたりさ、エクシートは知ってんのかって聞くもんで、エクシート橋なら知ってるぜって言うと、親父は、よっしゃ、そんならいいって言って、その橋を渡るだろ、そしたら丘を下ったとこに農場があるのさ。クックミアの谷の向かいだ。そこまで行ったら左手へ曲がって、リトリントンとミルトン・コートへ行く道に入るんだ。だが、ず〜っと上がって行っちゃぁいけねぇぞ。そこをしばらく上がって行ったら、右手に標識が立ってるだろうよ。これを曲がると、丘を下ったところにウェストディーンがある。オレだったら夜が明ける前に出るかなぁ。長(なげ)ぇ一日になるだろうよ。で、どんぐらい距離があるんだいって親父に聞くと、さぁてなぁ、イーストボーンまで26マイルだから、まあざっと16、17マイルってとこかな。だから30、40マイル歩かなきゃなんねぇってことよ。戻る頃にゃブーツ履いた足が痛かろうぜって言うと、親父は、ああ、だから早めに出るんだぜ。なんせ、生まれてまだ６ヶ月の子羊だ。あんまり速くは歩けねぇ。そういう仕事を請け負ったってことよ。

そして翌朝、オレは４時半に起きた。暗くなる前に戻って来たかったからな（もちろんこれは、お天道様と戯れんがために時計をごそごそいじくり回し始める［訳者補記夏時間導入（Summer Time Act 1916）］前の話）。だから、ポットに茶を淹れて飲み、食い物を切り出して少しつまむと、すぐさま出かけたのよ。気持ちのいい秋の日の朝だったが、ロッティンディーンからニューヘヴンまでの道のりと言ったら、そりゃもう退屈なもんだった。なんせあの頃、途中にあるもんって言ったら、ソルトディーンとポートベロウの沿岸警備隊の詰め所の小屋、それからホダーンの昔の料金所ぐらいで、気分の上がるようなものはまるでなかったか

らな。道を通る車も、オレとは反対向きに行く魚の行商人の荷車しか見かけなかった。ニューヘヴンで上がった魚をブライトンの市場へ運んでいくとこだったな。

ともあれ、とぼとぼとぼとぼ、ニューヘヴン、シーフォード、サトン、エクシートと歩き続けて、何とかウェストディーンに辿り着いたわけよ。そりゃもう長い道のりだった。もう15分くらいで11時って頃だったかな。ここまでで、聞こえはいい［訳者補記が気分転換とはほど遠い］田舎行きの一日とやらいう仕事の半分のとこまで来たわけだ。

農場の管理人のおやっさんが見つかったんで、子羊のとこへ案内してもらった。しばらく競りのことやら天気のことやら世間話をしてから、どうだい、一杯やらねぇかいって言ったんだ。ははは ぁって言うと、やっこさん、そいつぁ来るとこ間違っちまったな。ここにゃなんにもねぇんだよって言うのさ。昨日の分やら残っちゃいねぇのかいって聞くと、残るどころか、半分も行き渡らなかったってよ。飲みてぇんなら一番近（ちけ）えのはシーフォードかイーストボーンだから、おめえさんがどっち向きに戻るかによるなってさ。ロッティンディーンに戻るんだって答えたんだが、じゃあまあシーフォードってことだよな。そっから６、７マイルも先だぜ。子羊の奴らはどうするんだい、どっか水を飲ませるとこでもあるかい、どうやら今まで24時間丸一日ずっと囲いのなかに入れられてたみたいだがって聞くと、途中、納屋の裏に池があるから、そこに連れてっときゃいいだろうってさ。子羊らを引き取って礼を言うと、オレはまた歩き始めた。しっかしまあ、子羊の連中を追って歩いた最初の３、４マイルは地獄だったぜ。心底、骨が折れた。草の生い茂った土手の狭間の田舎道でよ。まあ当然やつらは相当腹を空かしてるわけよ。で、どうしても土手に上がっちまうから追っ払うと、今度は道の反対側の土手に行っちまう。あんときゃほんとに、賢い犬さえいてくれりゃあって思ったぜ。オレはもう、まるで通りの両側に手紙を届ける郵便配達人みたいな有様さ。てなわけで、シーフォードの外れにあるサトンに辿り着くまでの間に何マイルも歩かされたのよ。そっから先は石畳の道で、両脇も庭を囲った塀になってたから、ちったぁ速く進めた。まあ、そこでも、どこぞの家の芝の茂った庭に、門を潜って入り込んだりしやったがな。でもオレはあいつらを急かしたのさ。とにかくシーフォードに着くまではって。道をちょいと外れたところにいい案配に［訳者補記子羊たちを食ませておけ

る］ちょっとした草地のあるパブがあって、そこへ行こうってばっちり計算してたわけよ。ところがだ、着いてみたら店の外に巡査が立ってて よ。一杯やる間だけ子羊の連中をその草地に待たせといていいかって聞いたら、こう言いやがる。このうろうろしている生き物を直ちにここから連れて行け。如何なる家畜も午前９時以降、町のなかに連れ出してはならん。すぐに移動した方が身のためだぞ、ってよ。

さぁて、オレにとって次の頼みの綱は、バックルだった。バックルは海岸沿いに昔からある小さなインで、両端にドアがあって、なかには真横にバーがひとつっていう造りだった。昔は密貿易をやる輩（やから）の溜まり場になってた飲み屋だったんじゃねぇかな。冬になって南西から突風が吹いて潮が高くなったときなんざ、飲み屋の店主は靴下を濡らさねぇように二階に上がったもんよ。潮が高（たけ）えと波をバサっと被っちまうからよ。今だってシーフォードとイーストボーンの間を走ってるバスは、高潮のときゃあイースト・ブラチントンに迂回しなきゃなんねぇだろ。さてさて、やっとこさ辿り着いて、子羊のやつらに一息つかせるのにも、ここならしばらくは大丈夫だろうと思ったのさ。隅の方に塀で囲われたとこがあって庭へ続く木戸があるだけだったし、ここを閉めとけば大丈夫、出て行くまいと思って店に入ったわけよ。むかしゃあ２、３人で飲みに行ったときなんかパイントでビールを頼むんじゃなくて、持ち手の付いたクォートのジャグでビールを貰って、そっからグラス２つに分けて注いで飲んだもんさ。で、自分の番が来たらまた１クォート貰うって感じでよ。店主に挨拶を言って１クォート欲しいって言うと、あのオヤジ、まあ田舎のパブじゃ見知らん奴にゃあ大抵そんなもんだったが、オレのことを上から下まで嘗め回すようにしばらくじろじろ見てやがった。１クォートのビールとグラスを２つ出してくれたんで、オレは店主に半クラウン渡し、その１クォートを飲み干すと、まだレジのとこにいたオヤジにもう１クォートくれって頼んだのさ。オヤジは窓越しに１シリング10ペンス釣りを差し出すと、おめえ、連れはいねぇんだろって言うんだ。だから、もう１クォートぐらいひとりで飲むさって答えたのよ。オヤジの奴、へえ、おめえ、喉からっからなんだなってよ。で、ああ、そりゃロッティンディーンからウェストディーンまで一滴も飲まずに歩いてここまで戻ってきたんだ、そりゃ誰だって乾くだろうよって言ったのさ。そしたらオヤジが、へえ、こっからまだロッティンディーンまで行くの

かいってよ。だから、ああ、子羊が30頭、外に置いてあってよ、そいつらを連れて行かなきゃなんねぇんだって言うと、へえ、そりゃたいへんだなってよ。そいつぁ子羊の連中もくたくただろうよって言うから、オレはどうだい、やつらの倍歩くんだぜって言ってやったよ。

オレはこの１クォートも飲み干すと、いい気分で子羊の群れのとこに戻った。大方は地面に横たわってたが、オレはアイツらを急き立ててまた道に出た。最初はちょいと動きが鈍かったが、歩き出してくれてよかったよ。なんせ、まだ家（うち）まで半分も来ちゃいなかったからな。

次に向かったのは、ニューヘヴンのニューフィールド・インだった。その道中にもまた道の両側に草の茂った土手があったが、子羊の連中、大分くたびれてたらしく、草食いに行こうとしなかったからうまいこと追い立てることができた。ニューヘヴン橋［訳注＝Newhaven Swing Bridge（1866-1976）ドーヴァー海峡からウーズ川への航行を可能とする旋回橋］んとこで船が通るのを待たなきゃなんねぇかもって思ってたが、一艘もいなかった（その時間帯は橋のとこを横切る船もそう多くはなかった。あの頃は船って言やぁみんな帆船で、［訳者補記２本マストの高速縦帆帆装］スクーナー船に［訳者補記横帆の］ブリッグ船、それから大型の商用帆船みたいなもんだった）。だからオレたちゃすぐに町を通り抜けて、ニューヘヴンの一番［訳者補記西の］外れにあるパブ、ニューフィールドに行けたのよ。次のパブっていやぁ、もうロッティンディーンのいつも行きつけの店だったからな。ニューフィールドはまだ出来たばっかで、一軒ぽつんと建ってる感じだった。道の向こう側は荒れた草地で、道からは見えなかったもんでそんときゃ気づかなかったんだが、その向こうにちょっとばかし菜園があったらしい。ま、とにかくオレは子羊らにゃ休憩にもメシにももってこいじゃねぇかって思って奴らを草地に放し、心底安心し切って店に入り、腰かけて一杯やったんだ。結構でけぇ店で、ずっと奥の隅っこに寝とぼけた爺さんがひとり座ってた。言葉は交わさず、１パイント頼み、腰掛けてものの数分うめえビールを味わった。一杯飲み終えると、あともう一杯だけ飲んで帰るか、ってな気分になって次を頼んだのよ。２杯目のグラスに口をつけた途端にドアが開いて、男がひとり入って来た。で、隅っこに座ってた爺さんに、あんた、通りの向こうで菜園やってるかいって聞くんだ。すると爺さん、ああ、通りを下って突き当たったとこだって言ったのさ。そしたら男が、そう

かい、いや、どっかの子羊が群れ為して誰かんとこの畑の新芽を食い散らかしてるからよってさ。オレは心んなかで、やべぇ、そりゃオレんだって思ったもんだから、慌ててビールを飲み干すと、黙って店を出たのさ。見てみりゃ子羊のやつら、大喜びよ。そっから追い散らすのはなかなか骨が折れたが、なんとか追い出して、オレたちゃまた歩き始めたんだ。

さて、残りは５マイルほどだったが、これにゃあ随分と時間がかかった。右へ左へ走って追い回すなんて状態じゃなくて、もう、足を引きずってまっすぐとぼとぼ歩いて行く感じだった。ポートベロウのブラッキーの小屋に着いたときゃ、１匹はもう担いでやらなきゃならねぇかって思ったぜ。なにしろ、なかの２匹が大分ふらついてやがってたからな。だが、なんとか、ゆっくりちょこちょこ歩かせて、ソルトディーンの切り通しを登り切って丘の頂上まで来たら、イースト・ヒルからホワイトウェイ・ロードの上にある大きな畑のところまでずっと鞭で追い立てて、そっから道を下ってプラウのとこまで戻ってきたのよ。もう７時半を回ってたな。だから、15時間ほとんど歩きっぱなしだったってことさ。

パブに入ると、顔なじみの連中２、３人と一緒に腰を下ろして、聞きてえって言うもんだから、よっしゃわかったって、その日一日のことを、誰と会ってどんなことがあってって、一つひとつあれやらこれやら思い出しながら、かいつまんで話してやったのよ。くたびれてたせいだか何だかわかんねぇが、その晩、親父と顔を合わせるような時間には家に戻らなかった。で、次の朝６時半に仕事の指示をもらいに行くと、親父に言われたよ。おう、おめえ、ちゃんと行って戻って来れたかい。なんかあって道にでも迷ったんじゃねぇかと思ったぜ。くたびれたろうってよ。

ちゃ〜んと無事に子羊の奴らを連れて戻ったのかいって聞くから、ああ、でけぇ畑に連れてっといたぜって答えると、じゃあ大丈夫かどうか見てこいって言われたんで、行ってみると、アイツら、昨日連れてったとこのゲートの中にしっかり収まってて、まあ、立ち上がってたのは一匹だけだったが、みんなちゃんと生きてたよ。で、オレは奴らを叩き起こして、ちょこっと歩かせてみた。なかにはちょいと体の重そうなのもいたが、畑の反対側まで連れて行くと草を食い始めて、弱った感じはまるでなかった。家に戻って親父に、みんな大丈夫だって言うと、親父は、そうか、子羊の連中にゃ随分な長旅だったもんな、奴ら元気に歩いてきたのかいって言うから、ああ、２匹ちょいと怪しげなのがいたが、もう

大丈夫だって言った。親父には、昨日どんだけきつかったか、で、オレがビールで景気づけしながらやっとこさその仕事をやり遂げられたって話もしたから、それ聞いてどうやら親父も、こりゃこいつにゃちょいとしんど過ぎたかなって思ったようだったが、昨日の分の帳尻合わせでまた飲もうなんて思ってるかも知れねぇが、今日はプラウには行くんじゃねぇぞって言うんだ。まずはうめぇ朝メシをもらいに行けってよ。メシ食ったらウィーラーズ・ギャロップスに登って、そこに生えてるギシギシ（docks）［[訳注]タデ科の多年草］を自分のペンナイフで刈り取って、ハイ・バーンの轍（わだち）んとこに投げとけってさ。これならちったぁ楽だろうよ、おめえって。

で、オレはそこへ登ってって草を刈り、昔っからオレたちの間じゃビッグ・ベンって呼ばれてた、去勢牛に引かせて使うローラーの後ろに刈ったギシギシを放りに行ったのさ。ちゃちゃっとやっても３、４時間はかかったかな。メシ食いに戻ると、親父が、今日は昼からはちょいと休んどけって言うから、仕事には戻らなかった。

さぁて、子羊の連中はっていうと、新しい環境に馴染んでしっかり成長していったが、オレは今でも、ありゃあ奴らを歩かすにゃ、どう考えてもちょいと遠すぎたって思ってるぜ。

【８月】

「４月、５月、６月と来て７月
麦の成長を見るにつけ、自ずと顔も綻（ほころ）ぶもの。
８月が来れば刈り入れだ。切っては束ね、結わえてと
さあ、大鎌持って収穫に行くぜ」。

「若き相棒（Two Young Brethren）」

８月に至ると、一年も峠を越えて序盤の強い輝きは勢いを失い、大分落ち着いた雰囲気へと成熟してきます。春には刺激的なほど鮮やかだった牧草地の緑も、やわらかな茶色や灰色に完熟し、草を食（は）む羊の群れが歩みを進めればその都度花粉が小さな雲のような粉塵となって舞い上がり、これに驚いた

コリドンヒメシジミやヨーロッパシロジャノメなど小さな蝶たちが飛び回ります。深く入り組んだ草むらのなかに舞うその姿は、まるで色とりどりに輝く切り花のようです。春先の力強い成長の速度が緩んで威光は衰え、花びらは落ち、あちらこちらに種子が散らばっています。モンシロチョウたちは、凪いだ夏の空気にふわふわと広がるアザミの綿毛を追い回し、各々行く先は異なるけれど、あちらこちらへと飛んで行っては子孫を残すという同じ運命（さだめ）を全うしようとしています。声高らかに情熱的な歌声を響かせていた天翔（あまかけ）る鳥たちも、恋の季節は過ぎゆきひっそりと子育てに励む頃ですから、森は静けさに包まれています。

この時節は、あらゆるものが実を結ぶまさに成就のときで、農場ではここに至るまで季節ごとに、まずは農事暦を組み、畑を耕し、種を蒔いて作物の世話をするといった過程が最終段階を迎えようとしていました。髭を蓄えた大麦は頭（こうべ）を垂れ、小麦畑は背丈を伸ばして一面赤銅色や黄金色にこんがり焼き上がり、熟したオート麦の繊細な小枝はまるで昆虫の触角のようで、ほんのかすかな微風（そよかぜ）にも震えるほどでした。まさに、莢（さや）が弾けて地面に種が飛び散ってしまう寸前のときを迎え、農夫たちは鋭い刃物を手に、この一年の富を掻き集めて、目の前に波打つ広大な畑を棘だらけの切り株畑へと一変させていこうとしていました。

［訳者補記私の父］ジムの若い頃も、小麦の大半はまだ手で刈り取っていたようです。

干し草がぜんぶ片付いたらすぐ、今度は収穫のことを考えなくちゃなんねぇんだが、その前に、マングル（mangle）［訳注＝mangold：飼料用ビート（Mangelwurzel）。何れもサセックスの方言］とキャベツの作付けのために鍬（くわ）入れをしなきゃならなかった。これも出来高払いでよ、単純明快１エーカーにつき１ポンドってことになってた。全体に２回鍬を入れて、さらにもう１回鍬で均（なら）してようやく種蒔きよ。マングルもキャベツも大量に作ってたぜ。冬の間、乳牛に食わせるためさ。マングルを

20エーカーぐらいと、キャベツが12から15エーカーだったかな。おかげで忙しかったもんさ。これが終わらなきゃ収穫のことなんぞ考えられやしねぇ。

あの頃はまだ、麦の大半は手で刈らなきゃならなかった。［訳者補記自動で刈り入れを行うと同時に刈った麦を束ねていく］セルフ・バインダーはまだ出始めだったが、自動刈り取り機なら３台あったし、ケントから「出稼ぎの連中（swoppers）［訳注＝swappers：収穫の手伝いにやってくる季節労働者。何れもサセックスの方言］」を雇わなけりゃなんなかったしな。この辺の刈り入れ機はどれも馬３頭に引かせて使うもんで、［訳者補記前に平行に突き出た２本の］轅（ながえ）を［訳者補記その間に並んで入った］２頭が引っ張り、その前にいる引き馬（trace-horse）に小僧が跨がって指示を出しながら、角（かど）に来たらうまいこと曲がって行くのよ。刈り入れ機にゃ台がついてて、刈り取った麦はまずそこへ乗っかって、［訳者補記大きな扇風機みたいに］ぐるぐる回ってる５枚のレーキのうちひとつを調整して台の上に合わせ、刈られて台の上に並んでいる麦をそのレーキで片方へ寄せて一組にして台から落とす。オレたちゃ回ってる５枚のレーキを２枚飛ばしのタイミングで合わせて落とすもんだった。そうすると、麦束がだいたいバインダーに設定されてる大きさになったからな。茎が長いときなんかは２束を一括りにすることもあったが、小僧たちが運ぶには重くて難儀だったな。脱穀のために麦束を運ぶやつらにもきつかったろうよ。この機械を使うと、１日に６エーカーほどの刈り入れが出来た。オレが一番最初に見たバインダーはホーンズビー（Hornsby's）［訳注＝Richard Hornsby & Sons（1828-1918）。吸収合併の末、その系譜の一部は現在ドイツの Siemens Group 傘下］のやつで、でかい木箱に手を加えたような格好をしてて、２頭立てを２列に並べた４頭の馬に引かせて、前列の１頭に小僧が跨がり、角に来たら曲がる指示を出すってもんだった。刈り入れについちゃあ、まあ最初のうちは上出来ってもんじゃなかったな。なんせでか過ぎるし扱いにくいんだ。うまく束になるのは３回に１回って感じでよ。でもすぐ改良されてって、気がつきゃぜんぶ鋼鉄製の小型で性能のいいバインダーが出てきたぜ。前と違って、５フィート６インチ幅で刈り取った麦をきっちり束ねてくれた。

この収穫の時期にケントからやってくる出稼ぎの連中は、毎年決まった顔ぶれだった。そんなかにジョージ・リードのおやっさんってのがい

てよ。いっつも、おっかあやら、息子３人に娘まで、家族総出でやって来てて、まるで休暇を過ごしに来たような風だったぜ。

その娘、ネルについて、父は、「べっぴんさんでよ。歳もオレにぴったりって感じだった。16とか20とかじゃねぇかな。」と語っていました。

息子たちのうちビルとアーサーの二人はもう身体もでかかったんで、収穫用の小鎌（swop hook）［訳注＝swap-hook：麦類の収穫に用いる柄が短く刃の曲がった sickle の一種。何れもサセックスの方言］を持って麦を刈っちゃ自分らで束ねてた。残りはジョージのおやっさんが大鎌を振って刈り取り、ネルがこれを束ねてた。テッドはおやっさんの刈った麦をレーキで掻き集めて紐の上に置き、後ろからついてくるおっかぁがその紐で麦を束ねて結わえていった。こうして大鎌１丁と小鎌２丁で、奴らぁ夕方７時頃までにゃ相当な量を片づけちまってた。ビルとアーサーも刈るのをやめて、その日に刈った麦を全部束ね上げてたな。

奴らはここで働いてる間、農場の穀倉を寝床にしてた。［訳者補記ケント州特産の］ホップの収穫がまだだってときにゃ長めにいて、オレたちの収穫を手伝うこともあったが、実ったと聞きつけたらすぐホップ摘みに戻って行った。ジョージのおやっさんはうちの親父と握手をして、いつもこう言ってたな。「では旦那、これで失礼します。ほんとにお世話になりました。神のご加護がありましたら、また来年お目にかかります。きっとお守りくださるでしょうがね」。

それから、ジャック・ヒックのおやっさんってのもいたな。息子が二人いて、みんな出稼ぎのやつらさ。それにハリー・アシュダウン。息子二人と、体格のいいがっちりした若ぇ(わけ)のがひとり。こいつらは４人とも刈り入れが出来た。こいつらには麦が倒れて寝ちまってて機械じゃ刈れねえとことか、足場の悪(わり)い斜面なんかを任せてた。そう言やいっつも何人か日雇いの連中（roadsters）［訳注仕事を求めて遠方から道を歩いてやって来る人々。サセックスの方言］も手伝いに来てたな。

オレたちゃバインダーを５台使ってたが、１台につき馬が３頭と人が３人必要だった。ひとりは荷馬車引きで、横並びの馬３頭を率い、あと

の二人の役目は、［訳者補記こいつの通る］「道を切り開く」ことだった。つまりは、畑の周りに生えてる草を刈って縛り上げ、畑の周りをこの機械が通れるように道を作って行ったのさ。バインダーが畑を４周する間、この二人は機械の後ろをついて回り、出来上がった麦束を集めて［訳者補記互いに立てかけ］、あちこちに刈り束の叢（むら）（shocks（or stooks））を作っていった。これまた１エーカー当たり２シリング６ペンスっていう出来高払いの仕事で、オレたちゃ１日にだいたい８から９エーカーこなしてた。

８エーカーやれれば満足だったな。これで１ポンドの稼ぎになるわけだから、３人で分けて１日でひとり当たり６シリング８ペンスってことよ。ただ、［訳者補記麦が］「露で濡れちまってる朝」やら時雨（しぐ）れてるときなんか、何時間も待たなきゃならなかったもんで、そんなときの埋め合わせの分をもうちょっと稼いどきたかったのさ。オレは１日で11エーカー刈ったことがあるぜ。けど、こりゃちょいと馬の奴らにゃかわいそうだった。

オレたちゃ400から500エーカーの小麦を作ってたから、機械を全部使って刈り入れをやっても10日から２週間はかかった。で、これが終わると４人はお払い箱になって、堆積所に刈った麦を運ぶ仕事に移ったり、ひとりは遅場（おそば）の麦の収穫のために最後まで残ったりしてた。

豊かな実りを得る鍵は何と言っても天候に恵まれることですし、私たちのように生計が気候の変動に大きく左右される状況は、たいへん危ういものとも言えます。海から心地好い微風（そよかぜ）が流れ込む真夏ですら、爽やかな空気に覆われた早朝を迎えていても、夕暮れ時には打って変わって強い風の吹き荒れることもあります。朝には波紋を象った一枚のガラス板のように見えていた海が、茶色く煮えたぎった大釜へと姿を変えるのです。そして、風は、漏斗（じょうご）の役割を果たすハイ・ストリートを大きな唸り声を上げながら吹き抜け、まだ落ちてしまうには早い木々の青葉を毟（むし）り取っては道端に放り投げていきます。落ちた葉は至る所の溝に列を為し、［訳者補記寒気に色づく秋の落葉より］２ヶ月も早く排水管を詰まらせてしまいます。村の裏手にある丘の上では、打ち

付ける雨の重みと、繰り返し叩き付ける海水を含んだ塩気のある突風で麦が押し倒され、まだまだ行わなければならない作業がたくさん残されているのに屋内でじっと待つしかない農場の主（あるじ）とそこで働く者たちにとって見るに堪えない光景が広がっていきます。48時間かそこら経過するとたいてい風は収まり、その翌朝には勢いを落としたやさしい微風（そよかぜ）のなか太陽が昇って眼下に広がる被害状況をやわらかな光で照らし出します。その様子はあたかも、目の前のすべてはちょっとした冗談だと、つまりは、下々の人間たちにもその者たちが楽しみに待つ収穫といった事々にも、取るに足らぬものと関心などお払いにならない天候を司る神々のほんのお戯れであったと、まるで取り合わない風です。

しかし、一度（ひとたび）天候が回復し、日差しが強く日の長い茹（う）だるような暑さの日々が戻ってくると、次から次へと何エーカーもの麦が、雨風にではなく大鎌や刈り入れ機によってなぎ倒されていきます。日光で顔や前腕をマホガニーのような赤褐色にしっかりと日焼けした男たちは、馬たちに負けず劣らず懸命に働きました。馬たちは鼻面から泡汗を吹き、それをハーネスの革紐に滴らせながら刈り入れ機を引いて、立っている麦の数を減らし道幅を広げつつ、畑のなかを中心へ向かって何度も何度も回ります。最後の数周には、麦畑のなかにウサギなど野生の生き物の姿を目にすることがありました。島のようになった彼らの隠れ家がどんどん小さくなって、もはや彼らの姿を隠すことが出来なくなってしまうためです。かくしてウサギたちは慌てふためき、次々と切り株だらけになった畑を一目散に駆け抜け、安全な場所を求めて隣の畑へと逃げていきました。首尾良く逃げ果（おお）せたものも多かった一方、半数ぐらいは銃で仕留められたり棍棒で殴られ、日に焼けた地面の上で柔らかな毛に覆われたその身体を痙攣させながら命を落としました。もちろんこのウサギたちは、次の日曜日にラビット・パイの具となる定めでした。

干し草作りのときと同じように、収穫の際にも、男たちにはビールを振る舞う代わりにビール代が支給されていましたが、牛飼いのルーク・ヒルマン

のおやっさんの家にほど近いソルトディーンの谷の辺りまで刈り入れに出向いたときには、必ずおやっさんのところまで自家醸造のビールを買いに行きました。ルークはかなりの倹約家だったようで、もしかすると、父の少々品のない言い回しに倣えば「ケチくせぇじじい」だったかも知れません。ビールは、郵便で取り寄せた「ボタニック・ビア・ミクスチャー（Botanic Beer Mixture）」という名のハーブを混合したものをもとに醸造していました。度数の高いものではありませんでしたが、喉の渇きを癒やすのには適した類いのビールで、干し草作りや収穫の頃には多めに醸造して、喉がカラカラになった仲間たちに販売していました。皆でおやっさんの田舎家からそう遠くないところで収穫の作業を行っていたときなど、［訳者補記農場管理人を務めていた私の］祖父は若い農夫ひとりに声をかけてビア・ジャグを手渡し、「こいつを持ってルークの野郎のところでボウ・タニック（Boe-tanic）を２ガロンほど買ってきてくれ」と命じたものです。そして昼時になると皆で輪になって腰を下ろし、麦の刈り束の叢にもたれかかって、ルークが作ったビールで食事を流し込みました。午後も押し詰まった時分になると、子供連れの奥方や若い女性たちが、畑仕事をする亭主や彼氏のところへお茶と焼き菓子に瑞々（みずみず）しいリンゴを運んできましたので、わずか半時間ほどではありましたが作業の手を休めました。馬たちは立ったまま、鼻先に下げた飼い葉袋の中身をムシャムシャと食べていましたが、頭（こうべ）を垂れるその様は、まるで疲労困憊を訴えているかのようでした。汗びっしょりのシャツをまとった男たちは、各々お相手の女性と一緒に腰を下ろし、「軽食（bait）［訳注＝afternoon refreshment：干し草作りや収穫の時期、多くは度数の高いビールと一緒に供される食事。サセックスの方言］」を味わいながら暫（しば）し憩いのひとときを楽しんでいましたし、その傍らで子供たちは、お日様の下、笑い声を響かせながら、まだ刈られる前の麦畑の縁で、青いヤグルマギクや真っ赤なポピーなど色鮮やかで香りの良い花を摘んで花束を作ったり、住処を追われた野ネズミの子たちを麦わら帽子で捕まえようとして遊んでいました。

憩いの時は瞬く間に終わりを告げ、馬たちはまたとぼとぼと歩き始め、刈り入れ機のブンブンという音が再び轟き始めます。作業は夕方、１本残らず麦を刈り取り、黄金色に実った麦の穂が、敗戦を喫した軍の旗印（はたじるし）のようにすべて倒れてしまうまで続きました。そして、ついに日が傾き、待ち焦がれた涼やかな空気が静かに畑全体を覆い尽くす頃、馬たちは刈り入れ機から解かれ、男たちを乗せてそれぞれゆっくりとした足取りで村の厩へ帰って行きました。男たちも各々、重い足取りで家路につきました。へとへとではありましたけれど心は満ち足りていました。また日払いでそこそこの「収穫手当」を支給されていましたからね。もちろんルークは、自作のボウ・タニックを売り上げて得た小金を数えて、また悦に入っていたことでしょう。

ルークが自ら課したこの倹約な姿勢は、あるとき少々意地悪な仕打ちを受けて裏目に出てしまったことがありました。特別なことがない限り、村のパブで彼の姿を見かけることはまずありませんでした。おそらくは、家に［訳者補記自家醸造の］ビールがたくさんあるのに、汗水垂らして稼いだ大切なお金をビールの代金としてカウンターで支払いたくない、というたいへん分別のある経済観念にもとづいた判断であったのでしょう。しかし、ある日曜の夜、プラウの店主が、地元の催しの祝賀会か何かで近隣住民に無料でビールを振る舞うという話を聞きつけた彼は、このありがたい機会を逃すまいと一張羅を纏い、２マイル歩いてロッティンディーンへやって来ました。プラウに辿り着き中へ入ろうとした丁度そのとき、ユーモア感覚に溢れ頓知（とんち）の利くボブ・カウリーが扉を開けて店から出てきました。彼はルークに気づくと驚いた顔で、「おったまげたな、ルーク。おめえさんと今日ここで会うなんて。タダ酒の飲める今度の日曜までは来ねぇもんだと思ってたぜ」と言いました。ルークは面食らった様子でしばらく立ち尽くしていました。喉はカラカラで、飲みたくて仕方なかったに違いありません。しかし、彼の厳格な経済観念が崩れることはありませんでした。彼は店の扉を開くことなく、ボブの姿が見えなくなったのを確かめると踵（きびす）を返して家路につきました。哀れルークは、た

だ酒にありつける機会を既(すんで)の所で逃してしまったのです。もちろん、無料でビールが振る舞われていたのはその夜のことで、ボブはそんな大事(おおごと)になろうなどとは夢にも思わず、軽い冗談のつもりで声をかけたのでした。次の日曜の夜、再びめかし込んでプラウへやってくるまで、ルークは自分が騙されたことに気づいていませんでした。１パイント注文した彼は、店主の言葉に耳を疑いました。「ありがとよ、ルーク。２ペンスだ。先週の日曜に来りゃタダだったのに。残念だったな」。

謝辞

今回も Copper family の面々、就中 Jon Dudley 氏には細かな描写やこの地方特有の事柄など多くの点についてご教示いただいた。記して感謝申し上げる。